
悠なる翼

FLASH

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悠なる翼

【Zコード】

Z2724M

【作者名】

FLASH

【あらすじ】

一人の男と世界の崩壊…

これは、そんな景色から始まる物語。

世界と共に死ぬことを思っていたこの男は、新たな世界にて何を思うのか…。

とかなんとかカツコイイっぽいこと言つても結局は一次創作。まあ気軽にどうぞ。

崩壊（前書き）

とつあえず始まつたこの小説ですが、
更新とか、しばらくしません。
何故かって？
原作が手元にないからです！

言つて悲しくなるなー俺にマネをー

世界の崩壊。

この光景は、その言葉に見劣りしない、破壊の限りを尽くしてい
る様を見せつけていた。

今、この世界、この星は、魔力が飽和し、それに耐えることがで
きなくなつた星が壊れしていく…

いわゆる、最期を迎へ、滅びようとしていた。

この星に住んでいた人々は、滅びの運命に抗おうと逃げまじい、
ある者は、諦めたのか、慟哭をし、またある者は、居るかも分から
ない神に祈りをささげていた。

その様子を遙か遠くから見ていた俺は、

「せめて、安らかに。」

そう呟き、この星の人々を眠らせ……終わりを告げる扉への、せめてもの安寧の道を示した。

…これが俺に出来る限りの事だ。自己満足だというのは…痛いほど、よくわかっている。

それから数日後。大地は、完全に魔力に飲み込まれていた。星を完全に飲み込んだ魔力は、見るからに不安定で、今にも爆発しそうな雰囲気を漂わせているし、俺はそうなるだろう、と、予測をしていた。

だが、その予想は裏切られることとなる。

それは『悠久の旅人』として、唯一の『神と同等の力』を持つ俺を、良い方に裏切ったのか、悪い方に裏切ったのか…。

強大な魔力は、時空震を起こしていた。

「神は、まだ私に生きることを望むのか…？」

俺は、そう、つぶやいた。

考えた。これは運命なのだと。

この星に住む、俺以外のすべての生物が、死に絶えたとしても。

神の力を手に入れ、世界と共に生き、世界と共に死ぬことを考え、不死となつた利己的な俺への、世界の、この星の、せめてもの反抗なのだと。

世界と共に過ごすなどと云ひ、愚かな考えを持つた俺への、抗いなのだと。

俺は、世界と共に消え去ることを諦め、新たなる世界へと飛び立つ、最高級にして、最大級の、魔法の言葉を唱えることとした…。

「魔法同調。対称、『时空震』。」

俺にはこの言葉を唱えないと言つ選択肢もあつただりつ。そうしなければ、俺は时空震に呑まれ、魔力に還元。そしてこの世界と共に死んでいたはずだ。

しかし、同調を行つことで、俺は崩壊せず、時空震と共に、星の魔力が消え去るとともに、新たな世界へと降り立つことになるだろう。

俺は生きる道を選んだ。世界の抗いを受け入れ、新たな生を受けることを選んだ。

（俺は、この選択を後悔することになるのだろうか…。）

そんなことを考えながら、新たなる世界への扉 時空震へと呑まれていった。

崩壊（後書き）

てかこのプロローグ、かなり厨二入つてると思います。
ええー自覚します。し過ぎます。

いや、こんな馬鹿げた文章これからも書くとか予定にないからいい
んだけどね。

どうでもいいけど『悠久の旅人』の方もよろしくお願ひします

主人公紹介

工藤 理己
くどう りい

もはやチーダーマン。オリ設定の魔法、技、力とか使う。使える。

ただし、本気を出してるかは不明。

あ、名前とか女っぽいけど一応男。

てか見た目も女っぽいけどやっぱり男である。まる。

ちなみに見た目の方がだが、『禁書目録』のアレイスター（マイナーでゴメンナサイ。）が

中性的 ちょっと女より

になつた感じ。

なぜアレイスターか？いやなんかカッコイイやんけ。

潜在的魔力量はこのより多少少ない程度。

ただ、理己が使う魔法は、

『魔力をその魔法に適した物に、精製する。』

ことによつて、圧倒的な魔力効率を誇る。

その代わりに、無詠唱魔法において、魔力精製のタイムラグが生じる。

まあ、なんでもかんでもチーターマンじゅつせらんか。

? ? ? ? 「でか淡々と話していくつまらんだけ。」

お?なんだ理[乙]。待ち切れなかつたか?

理[乙]（以下「」）：「いや、他の作品ではこいつた催しひては、オ

リ主が出ると相場が決まつてゐるよつなのでな。」「

「ああ、いいだしつ。」

まあ悪いことはないが…おっと、これは紹介欄だったな。得意な属性は?

「火、闇、光を使うが、他の物もかなり高いレベルで扱える。ここでオリジナル属性として『無属性』（物質の具現化。F a t e の投影的な感じだが、基本一発もの。）といつものがあるのだが、そればかり使える。」

チーターマンとしての裏技はありますか。

「あるにはあるが、使う機会はほとんどないだらう。まあそのうち出す…つもりなのだらう。」

わかってるね）。基本的な戦闘法は?

「このネギま！の世界での、魔法使いに相当する立場だが、技の発動を主軸に置いた剣技と、間合いを見切る、移動術を使う。両方オリジナルだ。というよりかは、無意識に使っている物以外は、全てオリジナルであつたはずだな？」

そーいやそーつしつたねー

「やる気ないな。」

眠いんですよ…。あーそつそつ。服装とかその辺は〜?

「投げやりだな…。まあ良いだろ。服装は黒のロングコートにズボン。左右の腰に帯刀していて、指輪、腕輪（×3）、そうだな…他にはイヤリングをしている。ちなみに腕輪の方は見えん。ロングコートだからな。」

FFF（作者はクライシスコアしか知りません。すいません。）のジエネシスの服装をイメージしたものだつたね。赤 黒にした感じかな？

「ふむ、私についての紹介はこんなものかね。」

「そうだなー他に聞きたいことがあれば感想にて。感想は本文の方にお願いしますね。指摘は大歓迎です！なんせ、小説書くのに予習とか全然してなくて、いきあたりばつたりなので。

「まあ、そんなものかね。名前の方についての意見は、『悠久の旅人』の方が、大分進んだ後になると思う。すまないな。あまりに意見が多い場合は、多少ネタバレもいいよな？」

「そうだね。まあ読者は神様と、本書きの間では言つからね。ちょっと今までとは話が逸れますが、誰とフラグ立てるとか全然決めてません。流れで決めてもいいのですが、できれば皆様の意見をば、聞きとう存じます。

「口調が壊れてるぞ。」

「ね～む～い～…

「もう駄目だな。切り上げるか。」

といつあえず～これからもよろしくお願いします。

更新頻度の方は…頑張ります。

1話目、とりあえず異世界へ。（前書き）

頑張つて他の一次創作、あいまいな記憶、wikiを駆使して、書かせて頂こうかと思います。

修正が大幅に入ることもあると思いますがあしからず。

今回は単なる現状把握な感じです。

それではどうぞ~

1話目、とりあえず異世界へ。

「…………。」

見渡す限りの森である。

「……そんな適当な感じでいいのか？ ていうか、どうから話かけていいんだ。」

まあ二次創作だし？ ちなみに俺は神様（作者という意味で）だ。
お前には少々特殊な方法で話しかけている。

「神……か。信じないわけではないが、貴様は少し違うようだな。そ

れより、二次創作ってなんなのだ。」

いや、分からんでいい。分からなくとも大丈夫だし。

「ふむ…なら良いか。」

「いいんだ…。」

「貴様が自分で言つたんだろう?」

まあそうだが。お前はこれからどうするんだ?

「とりあえず街へ行こうと思つてはいる。何事も情報があつて有意義にできるからな。」

「ううか…。んじゃ俺からサービス。ここは一つの世界に分かれている。魔法世界と、普通の世界。」

「まつ?」

「ひらは魔法世界の方だから、魔法を隠匿する必要はないが、向

「へえ……なかなか親切じゃないか。」
「へえ……なかなか親切じゃないか。」

「ほつとけ。ただ、こちらの世界とは、魔法体系が違うから、よく考えて使え。あと、その魔力隠せ。

「善処しよう。」

「俺からほそんなことないだ。まあ頑張ってくれや。気が向いたらまた話かけてやる。」

「ふむ、すまないな。恩に着る。」

「ここまでのことにしてねえよ。まあそれじゃあな。

「ああ。」

声は途切れた。俺は次にすることを考える……。

(とりあえず…街の方へ行つてみないことには何もできないな。)

自分の階格好を確認する…。 一いつちの文化がどうかはわからないが、あの声もそれについてはあまり触れていなかつたし、大丈夫なのだろう。

(新たなる世界に来て… 何もないといつのも寂しいか。)

「お出迎えありがとう。 新たなる世界よ。 」

(… 結局むなしいな。)

『光によつて浄化する神の力よ、全てを破壊する闇の力よ、異なる力を持つ正負の力、今、我に道を示せ。』

(街は… こちらの方か。)

俺は、とりあえず街に向かつて歩き出すことにした。

「どうかの街（原作手に入つたら、何処かに修正させて頂きます。
多分。
B Y 作者。）」

街へ着いた俺は、街の異様な雰囲気を敏感に感じとっていた。伊達に長年いきてねえぜ！…？今なんか…まあいいだろ。この雰囲気は、戦争でしかありえない独特なものだ…。平然としている中でも見てとれる緊迫感、不気味な喧騒。

（戦争ねえ…小規模な物なのか、大規模な物なのか…）

十中八九、大規模な物だろう、この街の雰囲気は当事者のそれではない。となると、戦争に関わっていないこの街にも影響を及ぼすことのできる…。それは小規模な戦争では、起こり得ない事である。

【んー…よくわかったねー。】 作者テス。

…また出て来たのか？

【ん。ちなみに飛ばす年代はこりからで手を加えさせて頂いた。】

それは何故だい？といつか…中々面倒な時期に飛ばしてくれたよ

「うじやないか…

【いや…『悠久の旅人』の君なら、そちらの方が、面白いかと思つてね…（笑）】

…最後の（笑）が気に食わないが…まあ、有難いな。

【そんじやーねー】

（…随分唐突に居なくなるな。ん…この知識はアイツの置き土産か…『大戦』…面白そうじやないか…まあその前に…）

「道中襲つてきた賊を引き取つて貰わないとな。」

俺は賊の頭を抱ぎなおし、メンバーを繋いだ手錠をつないだ、縄を引っ張りながら、街中を歩き始めた。どつかに引き取つてくれるところないかな…。

1話目、とりあえず異世界へ。（後書き）

まだ余り介入はしません。次からです。やはり例によつて多分。作者のキャラは不定形、時々出てくるかもしません。

オリジナル魔法紹介

『光によつて浄化する神の力よ、全てを破壊する闇の力よ、異なる力を持つ正負の力、今、我に道を示せ。』

光と闇の、属性混合魔術。認識の魔法。

光によつて物（本来は狭い範囲で、物の形、中身を把握するのに使うものだが、今回は、人の魔力を感じ取るために使つてているので、無駄な魔力を消費せず、広範囲で使えた。）の形をとらえ、闇の力によつて、とらえた形を意識の中に具現化（擬似的な物質化）するものである。

人んちの内装、警備などが分かる為、盗みに非常に便利！

…いや、すいません。

応用で、アーティファクトの力を認識し、頑張れば劣化版（もしくは完全版、強化版）を再現できる。

それなりに高等な魔法の為、おいそれ簡単と使えるわけじゃない。

2話目、もはやお約束。（前書き）

あー原作手元にないとやつぱ細かにトコとか分からんですね……。

今回は、理凸と『紅毛翼』（ナギ）が戦います。

チーターマンよりじく強じです。

『ある程度、』『常識の範囲で……』。

……えーっと、本編をビール。

2話目、もはやお約束。

Side・主人公

とりあえず捕まえた賊たちは、街の人間に聞いたら引き取ってくれるところが見つかったので、引き取つてもらつた。

何処の世界にも賞金首っていうのはあるんだな。いや賞金賊?どつちでもいいか。

街の人聞いた後に、後ろから聞こえた「あれって最近ゆうめ……」とかなんとか言うのが聞こえたりしたので、ある程度予想していたが、それなりの賞金首（賊）だったらしい。

ところで、ドラクマって多いのか？（数ヶ月遊んで暮らせる
程の大金です。）ということにしてください。By 作者

まあいくらか金もてに入った事だし…不自由は無いだろ。さて…
あの自称神（作者です。）から授かった知識の通りの場所へ行って
みるとしよう。信用できる情報かどうか…はなはだ疑問ではあるが。

Side End

Side:『紅き翼』、ナギ　　「これからは、そのうち大幅な訂正に入るかもしれません。まる。

「はつはあー俺に掛かればこんな奴ら雑魚に過ぎねえぜ！」

俺はナギ・スプリングフィールド。連合の英雄（になる予定）だ！

俺は今、連合の依頼で、戦争に参加している。俺に掛かればこんな奴ら紙切れ同然だがな！

「それにしても…流石帝国と言った所でしょつか。この敵の数は半端ではありませんね。」

おつとローリーは俺の仲間のアルビレオ・イマだ。意味がわからんねーとこもあるけど、良い奴だぜ？

「ナギ。あんまり調子のつてると足元すべわれや。」

「わーつてんつてー。」

「これは青山詠春。変態だ。」

「…今、失礼なことを考えていいなかつたか？」

「気のせいだよ。」

「だがお主達。ここは戦場じや。気を抜いてはいかん。」

「これは俺の師匠—フイリ・ウス・ゼクト…まあロリジジイだな。」

「…詠春。主に激しく同意しよう。」

なんのことだ？

「とりあえず今は目の前の敵に集中し…つづ…なんだ…!?」

なんだこの魔力は…これは…俺を越える つ！

『

殺戮の天使』

瞬間、帝国軍は光に包まれた。

Side End

Side：主人公

『光によって浄化する神の力よ、全てを破壊する闇の力よ、天の力、
悪をも従え、集束の光にて、己が敵を貫け。殺戮の天使』

詠唱が終わり、俺の周辺に無数に停滞した闇の球から、純白の
閃光が降り注いでいる。

「……どう見てもやり過ぎたな。だつたらなんであいつはいづかると
良いなんて知識を……？」

魔法の効果自体は終わった…。だが、戦場は完全に荒野と化し、
帝国軍は逃げまどっている。あきらかにやり過ぎである。

「これは如何する……殺氣か。だが……あからざる過ぎだつ……」

『雷の斧ー』

「つとー『水雷の盾ー』」

水と雷の混合魔法で、敵のこのあきらかに雷属性の攻撃を誘導す
るー。

(分散ー)

雷の斧を受けた水雷の盾は、俺の後ろへと流れて行つた。

（アイツの言つていた面白い事つて言つのは…これの事か？なかなかの魔力量だが…才能はあつても…）

「対人戦闘の経験が…いや、違つた。…強者との戦いが圧倒的に足りない！」

俺は迎え撃つために剣を片方抜いた。銘は『轟炎』^{（こうえん）}。久々の闘いだ…楽しませて貰うぞ？

「来い！」

Side End

Side.『紅き翼』ナギ

「来い！」

そう言つてヤツは剣を抜いた。帝国の奴らを攻撃していた所を見ると、敵じゃあねえみてえだが、最強はこの俺だ！

「行くぜー！」

魔法を撃ちあって戦うってのもいいけどな……いつこいつ楽しこと
は、やっぱり拳でやらねえとな！

「楽しそうひ…よなー。」

俺は瞬動術で一気に接近して、魔力を込めて殴り掛か…つな！残像！？

「…」の世界の者達は奇妙な移動方法を使うのだな。」

…瞬動術を知らねえ？「これ程のヤツが？

「こないのか？それではこちちらから行こひ。」

「うおー！」

ヤバい、油断してた、てかコイツ…はええ！コイツが使ってんのは詠春のカタナってヤツに似てるけど…得物から感じる力が段違いだ！クソ、避けるのが精一杯だ！

向こうは攻撃をやめて構えを取つた。なにか…来る！

その剣は、ただの炎を纏つた剣の単純な振りおり。だが、剣の振りおりの速度、そしてなにより炎の密度が違う。

「よけろよ。」

剣は地面に触ると同時に爆発を起こした。辺り一面を焦土と化すほどの一撃……。

俺は、その余波に巻き込まれて気を失った。

Side End

今回は、

「ナギは自分が最強だと思つて油断していた。」と、
考えて貰えるとうれしいです。

一応出会いのシーンなので、死合（しあい）ではなく、試合とい
うことでの、ラカンみたく1-3時間？も戦闘しません。
というか、ゼクトって以外に影薄くないか？
この時点では…たしか居たよね？うん。多分。

オリジナル魔法（+技）紹介

『殺戮の天使』

詠唱…『光によつて浄化する神の力よ、全てを破壊する闇の力よ、
天の力、悪をも従え、集束の光にて、己が敵を貫け。殺戮の天使』

効果…詠唱開始から、詠唱終了までの間に、球状の漆黒のスフィア
を無数に精製する。

詠唱終了と同時に、スフィアから、指定した方向へ向かつて光の
光線をばら撒く。着弾と同時に爆破。広域殲滅用術式。

詳細…漆黒のスフィアは、魔力を圧縮するようなもので、光線は、
圧縮した光の魔力を打ち出した物、と考えて下さい。属性は光、闇
の混合です。

『断罪』

効果…剣技の一種。神鳴流の亞種みたいな感じ…といつと、分かりやすいかもしません。

ちなみに氣ではなく魔力。

単純な振りおろしだが、魔力の鍊度、精製の純度によつて炎の密度が変わる。着弾と同時に前方に爆発するので、完全に避けるのは難しい。

他にも質問があれば言つてくださいねー
今後もよろしくお願ひします。

3話目、紅毛賀の日常へ（前書き）

… 一次創作がこんなにも書きやすいものだとは知らなかつた。
と、思つ今日この頃。

それにもしても平日は更新が遅くなつてしまいますねー。
ゲームしてゐる時間まわせば毎日更新も夢じやない！
とか思いながらもゲームをやる自分でした。まる。

Side・主人公

…まずいな。やり過ぎた…。

いや、ここまでやるつもりは無かつたんだ。警戒されると思ったからな…。

向こうの残り三人、全員が軽くだが構えを取っている。いや…それもちょっと違うな。普通に警戒しているが正しいか。

「…まあ、なんだ。」ちよちよもやり過ぎた。

とりあえず謝る。そして氣絶して転がってるガキ?に、治癒魔法を掛けた。…ちよちよとは警戒が解けたか。

そんなことを考えると、例のガキが起きた。ちゃんと避けてはいたようだな。それにしても回復が早い。潜在能力の賜物というところか。そんな時。そのガキはイキナリ、

「お前強いな！俺たちの仲間にならうねえか？」

…なんだと？

S i d e E n d

Side・『紅き翼』 詠春

…ナギがやられた。

予想外だった。帝国への圧倒的な攻撃を見たとはいえ…だからといつて、ナギが負けるとは微塵にも思っていなかつた。

ナギは、この『紅き翼』で最も強い。いや、世界でも五指以内に必ず入るだろう…。

そのナギが負けた。見る限り、純粹に戦闘を楽しんでいたようだが…それでも、警戒するに越したことはないだろ。

そう思い俺達は軽い構えを取つていた。

唐突に向こうは、

「まあ、なんだ。」こちらもやり過ぎた。」

そういうた途端ナギが水色の淡い光に包まれた。怪我が治つて行く所を見ると、どうやら治癒系の魔法であるらしい…。だが、どうみても普通の魔法とは違つ。

そういうえば、先ほどの一撃も、神鳴流のようく氣を使つた物ではなく、明らかに魔力を使つたものだつた。刀を使つている所を見ると、神鳴流と同じ極東宗派のはずなのだが…魔力を使う剣術など聞いたことがない。

とりあえず敵ではないようなので、構えを崩す。…ナギが起き上がりつて來た。氣を失つていた時間が短いところを見ると、ダメージ自体はほとんどなかつたようだな…安心した。

だが、安心してはいけなかつた。別の意味で。

「お前強いな！俺たちの仲間にならねえか？」

…空耳だといいんだがな…。

いや…これはナギだ。ナギは「冗談とか結構言つたはずだ。少なくとも普段はそうだ。

…だからこれは空み

（延々と続きます（笑））

「お前強いな！俺たちの仲間にならねえか？」

Side: 『紅き翼』 ナギ

…負けるのは久々… つてか俺多分負けたことねえな。

負けたらもつとムカつくかと思つてたけど…なんつーか、コイツなら良じょうな気がしてきた。

「…勧誘する理由を聞かせて貰いたいのだが?」

む、そんなん決まつてんじゃねえか。詠春がなんかぶつぶつ言つてるが無視する。JJCのリーダーは俺様だ!

「お前が強いからだ!」

…なんでみんな呆れてやがんだ?

「私は君に攻撃をしただろ? 敵かもしれない相手を仲間に入れるのはどうかと思うのだが?」

あーグダグダつるせえ! そんな長じゅセリフペラペラ喋つてんじゃねえ!

「ナギ。私もこの人と同じ意見ですよ。」

なんだよアルまで…。

「ワシも同じじや。」

師匠もか。あの野郎はなんか笑つてやがるし、あーもうワケわからなくなつてきやがつた！

「お前は敵じやねえだろー多分ーそれで強いから仲間になれー！」

もういいでござりやがれ！

「…色々と言いたい」とはあるんだが…。言つても無駄だろつな。

…それは俺がバカだつてことか？（当たりです。）

「お前たちの仲間にならう…」これで良こののだらう？

「ああ、よろしくなー。」

よつしゃあー！

「…リーダーは変えた方が良いと思つや。セレの三人。」

「セレビヤのう…。」

「ああ…。」

「セレですねえ。」

その後、小声でそんな話をしたそつや。

Side
End

紅き翼に入った。コレがあの声の意図だったのだろうか…全くもつて謎だ。あの声は俺よりも底が知れない。

「おーい理口、置いてくれ?」

「そういえば、名前を言つていなかつたのに気がついた。俺の名前は『工藤理口』。世界と共に、古い名は捨てるにし、かつての仲間の名を、少しずつ貰い作つた名前だ。」

「この名前を聞いたとき、他の連中は、

「「「お前は女なのか（ですか）？」」」

と聞いてきたが、勿論そんなことは無い。普通に男だ。

それと詠春が、

「その名前は……極東出身か？」

と聞いてきたが、違うと答えた。出身はそもそもこの世界では無いこと言つたら驚かれたが、この話はいざれ話すとしよう。

今現在、『紅き翼』のメンバーは、大規模な戦線が張られていないため、街に来ている。道中、戦闘を延々やり続けた記憶もあるが、これも後に記すことにする。…記すって、何処にだ？

「ああ、少し待つてくれ。」

今俺は、宝石をいくつか選んでいる。長年趣味にしてきたアーティファクト作りだ。新しい世界の素材と言つのも新鮮で良いものだと思う。かといって、金は使うとすぐ無くなってしまうから、いくつか良さげな物を買って、店を後にする。

「すまないな。ナギ。」

「あー良いつて、良いつて。気にすんな。」

「宝石など、何に使うんですか？」

「ああ、アルか。お前はいきなり話掛けるのをやめや。」

「善処しましょ。」

「…まあ良一。こればかりの魔法を使ひの上うまいとしたものを作りつかと思つてな。」

「やうこえば、お主は他の世界から来たさじやつたな?」

「なみにればヤクト。」

「ああ。独自に研究した魔法といつで全て通すのは少し無理があるかと思ひのでな。」

「ならワシが教えよ。」

…ふむ、悪くない提案だが。

「いいのか?」

「うむ。ナギのつこでじや。」

俺はついでか。

「まあ…よろしく頼もう。師匠？」

「おーお前もゼクトの弟子になるのか？ならお前は弟弟子だな！」

「どうから湧いてきた。ナギ。」

「人を虫みたに言うな。」

「無視すんな！」

S
i
d
e
E
n
d

3話目、紅毛賀の日常？（後書き）

更新は不定期です。

読んで下さったみなさまには感謝を。

・本文ふざけ過ぎですかね？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2724m/>

悠なる翼

2010年10月14日13時52分発行